

通師門人学禪院と身延衆徒

奥 野 本 洋

はじめに

祖山第一期後董問題は、身延三十一世寂遠院日通上人が、延宝七年江戸谷中瑞輪寺において遷化せられた後、その遺言状から起こったものである。通師は身延後住に飯高学室の先聖一円院日脱上人を請待すべき旨を認められるが、それに対し、一山衆徒の中に反対するものがあり、山内を二分する紛糾を生じさせるに至った。その結果、寺社奉行の評定を仰ぎ、学禪院日逢をはじめとする通師門下側が勝利し、敗訴せし恵性院側は追放並びに遠島に処せられることとなった。勝訴側の総員は百二十名といい、敗訴側の総員は二百七十余名といわれているが、今回、両派の代表といえる僧侶について考察を試みた。

一、後董問題

山内は通師の遺状派と圍取派の二派に分かれることとなった。遺状派の主張は、後董には日通の定めた日脱を迎える事であった。反対派の圍取派は、圍にて後董を決めることによって依怙最厚を引き起こさないという主張であった。衆徒の数から推せば、日脱請待反対派が二倍以上あったにもかかわらず、なぜ敗れてしまったのか、その原因を探る

通師門人学禪院と身延衆徒（奥野）

には資料が乏しすぎるが、『身延山坊跡録』から身延衆徒がどこの住職であったのかを中心にみていきたい。

『身延山史』をみてみるに、遺状派の旗頭となったのは、学禅院（通師門人）・頭妙院（境師門人）・正法院（境師門人）・大林房（通師門人）・麓坊（同上）・山本房（同上）、その他通師弟子として修玄院・良叔・嶺海（遠沾亨師）・是寛らである。

学禅院は、『坊跡録』の名僧部（ごうぶ）に名を連ねているが、それによると「山本房十八世於當山勲功アリ通師門人備後実相寺建立水戸妙雲寺中興」でもある。「山本房は紀伊水戸両君之母堂養珠院参詣之時ニ宿房也日彦代」とあるように、十五世惠照院日彦代に客殿を再建立し、養珠院を泊めるべく用意をしている坊である。その坊の住職を勤めることとなった一因に、備後（現福山市）実相寺の開基が学禅院であったことが考えられる。実相寺の開基檀越は福山城主水野勝俊家老職上田勘解由直定（なほ）であり、徳川家とは深い関わりがある人物である。身延に来るについては、徳川家との関わりの深い山本坊に住職することが充分考えられる。又、後董問題において、寺社奉行をはじめ、評定衆であった老中、大目付との関わりも推察出来るところである。さらに、日逢は、日通師のもと七面山本宮の造宮他幣殿、拜殿等一式の建築事業に参画しているが、この時の身分は執事であり、「甲駿両国ヲ巡テ道俗ヲ勸化」出来る立場、即ち幕府統制下のもと、自由に諸国を歩ける条件を備えていた人物と考えられるのである。『身延山諸堂記』をみてみると、稲荷大明神の再興発願主であり、稲荷大明神別当ノ房建立に際しては智寂日省師より本尊を授与されている。又、影現七面大明神の発起主に学禅院の名がみられ、この時も諸方を勸化して新建立につとめた様子がうかがえる。学禅院は敬神坊、妙石坊の開基でもあるが、妙石坊においては、「窮年ニ学禅院日逢道俗ヲ勸メ銭ヲ窮民ニ与ヘ石ヲ拾ハ令テ妙経ヲ書写シ此処ニ取メ石経ヲ起ツ」とあるような浄行を成就している。この石塔は今も妙石坊に

存在し六老僧の塔の脇に立っている。亨師の棟札には、身延山高座石の祖師堂新建立の本願主として学禪院の名がみられるのである。七面山麓の神力房に關しても学禪院の業績が残されている。神力房四代法源日流の時、学禪院が「七面社ノ古材木ヲ以テ二間ニ四間ノ堂ヲ造リ」とあり、その事が通師の棟札に記録されている。さらに七面山奥の院の影嚮石の小社についても学禪院が建立しているのである。以上のことから考察するに、学禪院はただ山内一ヶ坊の住職ではなく、法主の片腕として活躍をした院代的存在であったことが窺われるのである。

次に頭妙院と正法院であるが、この二人はいずれも境師の門人である。山内が二分された時、この二人は境師の弟子であるにもかかわらず通師の弟子達と手を結びと反対派から責められるのである。頭妙院とは覚林房の十四世、定林房の十二世を勤めた日承聖人である。後董問題の時期には定林房の住職であつたはずである。山史によれば、時の覚林房は反対派の一員となつているので、賛成派の日承は定林房の住職であつたらうと推察される。日承は身延山の一老職を勤め、後に日亨より聖人号を贈られている。正法院は竹之房十八世の日運であり、同房の中興と称せられている。日運が中興と呼ばれる理由は、客殿、庫裏、表門、諸尊を貞享五年より三年間に亘り、悉く造立、又高下ある境内地を平坦にしたという功績があつた故である。日運は竹之房を再興の後、西谷正運坊に閑居され宝永七年十月十一日、七十五才で遷化している。延宝七年の後董問題が生じた時には四十四才であつた。通師の門下の勢力が強かつた為、後董問題に勝利したのであろうが、境師門人のこの二人が通師門人と一緒に頑張つた事が、反対派に対する大きな影響を及ぼしたと考えられる。学禪院以外の通師門人では、大林房十五世大林院日誠大徳、麓房十九世頭了院日盛聖人、山本房十九世本園院日義聖人の三人がいる。頭了院は志摩房十一世でもあり、名僧部には當山聲明師、能筆之とあり、後に身延山一老職を勤め、享保二年七十二才で遷化。又、上ノ山頭盛坊の開基であり、晩年醍醐谷高雲庵

五世として閑居している。後董問題時には三十四才であった。本圀院も名僧の部に大験者と記されている。同師は山本房の厨子を再建、さらに二十世妙光院日明の代に亘って庫裏の建立を正徳元年完成させている。本圀院は通師の門人と同時に学禪院の弟子でもある。宝永年間、思親閣へ百日間登詣し、その折、妙翁稲荷を感得したと伝えられている。⁹⁶ この他、通師の弟子として、後に久遠寺三十三世に晋山した遠沾亨師頓海の名も見られる。時に亨師は二十四才の若さであった。

一方、反対派の代表には、禪定房・圓台房・武井房・覚林房・真如院・法性院・鏡像院・慈雲院らの名が挙げられる。禪定房とは大林房のことであり、⁹⁷ 十四世禪定院日貞聖人であると思われる。日貞は玄成院とも称し、厨子建立主とある。圓台房の時の住職は、遷化年月日から推して十一世了光院日明と思われる。武井坊は、十三世正行院日恕聖人であろう。坊跡録には十三世寿遠院日遵聖人、十四世正行院日恕聖人とあるが、後に朱書きで訂正されている。遷化の年が日遵が元禄七年、日恕が元禄十年とあるため歴代を間違えたのであろう。次に覚林房だが、十三世意真院日誠聖人ではなからうか。十四世顯妙院は賛成派の筆頭に名を列ねていて、滅後亨師より聖人号を贈られており、十五世法住院日宗も同じく亨師より聖人号を受けている。亨師は通師の弟子であり賛成派の一人であったため、反対派の僧に聖人号を贈ったとは考えられない。遷化年月日から推し日誠をさしていると考察した。真如院とは端場房十九世真如院日住と考えられる。日住は日受ともいい、宝永四年七月三日に遷化している。法性院は志摩房十世法性院日逗聖人であろう。聖人は字を想林といい、武井房日恕と名前の上から兄弟弟子のような関係があったことが想像出来るのである。日逗は志摩房の庫裏を再建した旨の記録が残っている。⁹⁸ 鏡像院とは東谷杉之房十四世鏡像院日鋭大徳であらう。杉之房は明治七年に武井房へ合併されているが、もともと本院第五世鏡田阿闍梨日臺上人の開基した房であ

り、亨師の正徳二年冬改正の『房跡録』に依れば身延山年中行事二十房中の一つであることがわかる。慈雲院とは西谷南向房十世慈雲院日言であると思われる。坊跡録には慈雲院の脇に墓で二ヶ所消された跡が残っている。反対派が住職をした房の次の歴世には通師門下が就任している例が多く見られる。禅定房（大林房）十四世禅定院日貞の後は、通師の弟子である大林院日誠が十五世におさまっており、武井房十三世正行院日恕の後に通師門人の寿遠院日遵がすわり、志摩房十世法性院日逗の後は通師の弟子の顯了院日盛が就いている。清水房十六世惠照（性）院日近も反対派の一人であったが、通師が延宝七年二月十一日江戸瑞輪寺に化した後、二月二十六日その遺状を祖山で披見したところ後董問題が生じることになるが、その年の十月四日寺社奉行で裁決が下り、無念の思いで同月十七日遷化された様子がうかがわれる。その後、十七世に通亨につかえた遠光院日説が就任している。遠光院は延宝七年には未だ十九才の若さであった。

山内を二分して争われた後董問題であったが、その後、賛成派であった人達の活躍が目立ち、論功行賞的な人事が行われたことも考えられるのである。身延山諸堂記を見ると、新しい建築が行われる時の奉行僧に、観静房日諦の名が随所に見られる。日諦は西谷芳春坊の三世であるが、杉之房本理院日住の弟子である。日住は通師の弟子であり、本行房十三世、又一老職を勤めた僧である。即ち日諦は日通の孫弟子にあたり、脱省亨三師の時代に活躍したことがわかるのである。

二、学禅院日逢の弟子について

妙石坊の祖師堂裏にある歴代墓の中に、他の墓に比べ一回り大きな墓がある。妙石坊の開基、学禅院日逢の墓であ

るが、その両側面に、弟子孫弟子の名が彫られている。右側の弟子については次のようであり、

永祥院	立浄日定
学立院日義	顕立日浄
弟 本国院日義	玄叔日幸
智光院日妙	学惠坊日清
子 観性院日相	惠源坊日教
惠眼院日堯	顯了日是
	玄哲日理

又、左側の孫弟子については次のようにある。

心要日山	智達日体
智融日妙	宣長
日亮	玄覺日浄
孫 惠光日遥	幸連日祥
義天日觀	見静日禪
弟 幸順日慶	智岸日暁
幸存日相	惠立日栄
本妙坊	智性
	立弁
	惠天
	幸明
	常寿

両側とも三段になっているが、弟子の上段には惠眼院日堯、觀性院日相、智光院日妙、本圀院日義、学立院日義、永祥院の六人の名が見られる。今回、坊跡録を中心に調べてみたが、惠眼院、永祥院については捜すことが出来なかつた。觀性院日相は桶沢房の二十六世で正徳二年に遷化している。二十五世寂亮院日承は通師の弟子、二十七世亨紹院日隆は享師の弟子である。通亨に弟子という僧も多く見られる時代であるが、墓から学禅院の弟子ということがわかる他は知ることが出来ない。智光院日妙は、定林房の十六世であり、裕師時代には一老を務めている。坊跡録脇書きには、享保十八年遷化省師の弟子とある。享保九年客殿を再建、定林房へ住職する前は、水戸妙雲寺の十世、加倉井妙徳寺の二十三世を経験している。水戸妙雲寺は、学禅院日逢が八世を務めたところであり、その弟子が十世に座することは理解出来るところである。又、何故に水戸なのかということになると、前にも述べたように学禅院が福山に開いた実相寺の開基檀越福山城主水野勝俊家老職上田勘解由直定との関わりが浮かぶのである。本圀院日義については前に述べた通りである。学立院日義は東谷南延房の九世中興であり、学立房の開基でもある。勅許権律師日詮上人とあるのだが、兄弟弟子に本圀院日義がいたため、日義を日詮と変えたと考えられる。学禅院の弟子となっているが、通師の弟子でもあり、学禅院の弟弟子にあたっている。南延房の中興と言われる所以は、師の代に厨子を八間に七間半に増改築、廊下、座敷、門、兩尊、祖師、鬼子母十如、大黒、七面、三宝荒神等を全て新建した功により脱師代中興の号を賜っている。当時大変な力を持っていた僧の一人と考えられる。ちなみに本圀院日義の一才年下である。永祥院については坊跡録を捜すも見あたらない。

一段目については、院号が無いため捜しにくいこともあるが、顯了日是とは、志摩坊十一世顯了院日盛聖人と考察した。顯了院は通師の弟子であり、坊跡録を見るに名僧の部並びに一老職の部に出てくる僧である。身延山聲明の師であ

り、上の山頭盛坊の開基、又、麓房十九世、高雲房五世の閑居である。又、能筆であったことも知られる。享保二年に七十二才で遷化。本圀院日義、学立院日詮らより年長である。惠源坊日教は、学立院日詮の弟子に学立坊二世学圓日教法師がいるが、時代的に合致する人物である。日教は学立院日詮の弟子と記録されているが、日詮は通師門人であると同時に学禅院の弟子として日逢の墓石にその名が見られ、その一段下に惠源坊日教とある為、惠源坊即ち学圓日教法師と考察した。日教は享保九年正月二十四日遷化、年令は不詳。玄叔日幸は、坊跡録中にその名を見ることが出来ないが、池上本門寺発行の『日蓮宗寺院大鑑』中、善学院西谷檀林第四十世に統要院（玄叔）日将とあり、妙了寺の十九世とあることから、玄叔日幸と統要院日将を同一人物と推察したが間違いであろうか。妙了寺は勇通法縁の寺であり、遷化年月日も享保十六年ということ時代は合うのである。立浄日定については、東谷福泉坊七世に南林房日定という僧がいる。享保九年七十二才で遷化という時代から推しただけで学禅院の弟子、あるいは通師の関係ということを知ることは出来ない。

三段目には宗善日苗と一人だけ名が彫られている。この人は、妙石坊の二世宗善坊日顕法師と考えて間違いないであろう。宝永五年に遷化しているが、妙石庵の祖師堂建立の願主であり、学禅院の下で妙石庵を開基することに中心的な働きをした人と考えられる。妙石庵の歴史を見るに、法師のクラスが多く、院号も少ないところから寺の格式はさほどでなかったのかと想像される。六老門跡を中心に有力な寺院は、歴代に院号があり、聖人あるいは勅許上人号を賜わっている。又、その次なるものは大徳がつき、法師はその下になっている。

孫弟子についてみると、本妙坊とは歴代の遷化年月日から本妙坊二世寿了院日久大徳と考えて間違いない。日久は享保十年六十八才で遷化している。学禅院が元禄十二年六十九才の時、四十二才である。孫弟子ということであ

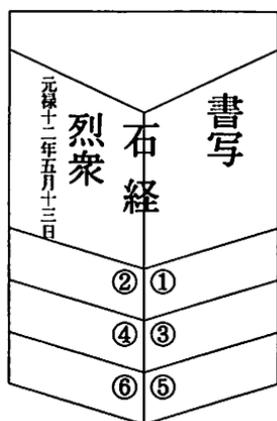
るが、師僧がだれであるかはわかりかねる。幸存日相は了雲坊四世に学了房日相なる僧がいるが、時代としては一致するものの遷化年代等未詳である。学了房日相が了雲坊を元禄十三年に再建したとの記録があるので幸存日相が学了房日相である可能性はある。幸順日慶については、山本房二十一世本地院日慶聖人が考えられる⁴⁴。日慶は寛延二年七十五才で遷化しているので、元禄十二年学禅院六十九才の時二十六才の若さであるが、学禅院の弟子本圀院日義が山本房十九世で当時四十九才であることを考えると、孫弟子としての年令差、山本房歴代ということから幸順日慶即ち本地院日慶の可能性が強いと考えた。坊跡録には裕師弟子一老とあり、晩年には一老を勤めるほどの僧となっていた。惠光日暹は、隅之房十六世惠光院日暹である。宝永三年六十五才で遷化しているところから元禄十二年には五十八才である。又、桶沢房の二十三世でもある。隅之房、桶沢房どちらを先に住職したかについては、はっきりしないがここではふれないこととする。日亮とは南谷文殊坊七世泰秀院日亮であろうか、享保十七年に遷化している。同坊五世もただ日亮とあるだけで、遷化年等未詳だが、前後の歴代住職の遷化年から推察して可能性がある。智融日妙は延寿坊十一世の法性院日妙が同時代の僧として考えられる。宝暦二年の遷化である。孫弟子の二段目中、見静日禅とあるが、その時代、日禅と名のつた僧の中で杉之房十七世本静院日禅が考えられる。日禅は宝暦九年遷化とあるため、元禄十二年から数えると六十年が過ぎていたため、遷化年令が八十才以上であれば、当時二十代の僧として名を列ねていたことが考えられる。杉之坊十五世は本理院日住であり、日住は通師の弟子ということであるので、通師、学禅院との関わりがあるのではと考察した。三段目に書かれている常寿、幸明、惠天、立弁については、院号あるいは房号、日号が無い坊跡録から捜し出すことが出来なかった。

以上、学禅院の弟子孫弟子についてみてきたが、その中には身延山一老職を勤め、名僧といわれた顯了院日盛をは

じめ、本圀院日義、観性日相、智光日妙、学立日詮というそうたる人物がいたことがわかる。学禅院はそれらの弟子の力を借り、本山の執事として多くの建築等、身延山の境内整備に力をつくしたのであろう。

三、書写石経烈衆について

元禄十二年五月十三日、高座石妙石庵の境内、妙石庵祖師堂の左手に六老僧の供養塔が建てられている。その時に集まった大衆は、千五百万遍の唱題をして開眼供養に列したと記録されているが、同時に石経を書写した烈衆が山内に多くいたことが石に残されている。その自然石は一人では動かせないものであり、現在六老僧の供養塔の裏に立っていて、そこには次のように書かれている。



- | | | | |
|---------|-------|-------|------|
| ① 正法院日運 | 孝善日真 | 降光坊日周 | 玄脱日陽 |
| 智眼院日□ | 妙栄日禮 | 常栄坊日成 | 義山日理 |
| 顯了院日成 | 惠光日明 | 成道坊日徳 | 蓮久日喜 |
| 惠光院日遥 | 一乘坊日心 | 松林坊日祐 | 了□日覚 |
| 本圀院日義 | 林蔵坊日性 | 円柳坊日弘 | 是順日妙 |
| 大運院日義 | 義俊日玄 | 円覚坊日照 | 琢玄日珠 |
| 円教坊日然 | 玄叙慈 | 大運坊日義 | 性日相 |
| □運院日順 | 惠感日恵 | 円教坊日然 | 惠感日恵 |
| ③ 知法院日義 | 義真日繼 | □運院日順 | 義真日繼 |

	②玄理院日義	④修了院日性	⑥春水日綠
	正住院日中	一音院日徳	秀達日雅
	智應院日感	円信庵日忠	通然日芳
	杉野坊日住	蓮信坊日具	泰隆日泉
	覚林坊日俊	仙寿坊日盛	是立日建
	清水坊日説	延寿坊日了	春東日恵
	南延坊日義	円信坊日清	幸順日慶
	本善坊日到	麓坊日明	玄叔日幸
	理教日審	清閑坊日恵	恵善日苗
	是周日弁	観松坊日秀	清閑日居
	本蔵院日納	本住坊日信	了達日覚
	自侃日應	宗賢坊日運	宗善日妙
	教山日療	中山坊日理	

書写石経刻衆という文字と元禄十二年五月十三日と書かれている文字はハッキリ読み取ることが出来るが、その下に彫られた僧侶の名前六十九名については三百年の年月が経っているため読みきれないところもあった。しかし今回六十数名の名を読み取った結果、その僧侶が当時どの坊の住職をし、どのような立場にあったのかを考察してみた。石に彫られている名は、やはり三段になっており、一番上から長老、中堅、若手の順になっているようである。元禄十二年は学禅院が遷化した宝永元年より五年前のことである。脱師から省師へと法主が変わった年にあたっている。三段に彫られた名は、それぞれ真ん中を中心に左右へと並んでいる。この石は学禅院が発願主となって建てたものに

違いないと考えられるが、その中に自身の名は彫られていない。左右どちらが上座なのであろうか。彫られている僧の名から推察するに、右正法院日蓮であらうか、正法院日蓮は先に出てきたように脱師を迎える時の賛成派の代表でもある。竹之房歴世であり当時六十四才の長老であった。次に左の玄理院日義であるが、覚林房の十七世である。玄理院は朝師堂建立の僧であり一老職を勤めている。さらに名僧の部にも出てくる人である。常陸久昌寺蔵の日乗上人日記には、元禄十三年二月十八日、「身延より省師御使僧真浄坊惠性所に到着、御年頭且御機嫌伺のため也。真浄坊庵に来る。」同十九日「真浄坊同道せし也。」「真浄へ御料理已て御目見被仰付也。」「今夕真浄坊へ夕飯すゝむ。むかしより近付の人なれば、ゆるゆると物語聞ゆ。」等々あり、即ち身延山東谷真浄房十一世徳成院日性聖人の事が書かれており、そのつづきに、「省師より御書被下、杉原二束、中啓被下也。玄理院より状来る。右へ返書今宵認テ遣はさんとせし也。」「予が状に委書付玄理院方へ遣ス也。」同二十六日、「身延玄理院より状来る。」等とあり、当時、身延と水戸との関係に玄理院が関わっていた事がわかる。さらに元禄十四年二月二十一日には、「日省師着下、方丈ニ被為入。……玄理院天瑞等待者衆少し。」とあり、省師の御供として水戸に出かけられることもあったことがわかるのである。玄理院は奥州会津に産まれ、身延では燈主堂萬燈室両堂の額を認めたる人でもある。又、真浄房の過去帳を正徳三年五月十五日、徳性院日性の代に書いているが、玄理院が遷化するわずか四ヶ月前のことである。このことから師は能筆であり、真浄房日性との関係も理解できるのである。日乗上人日記を詳しく見ていく事によって身延と水戸との関係が明らかになると思えるが、その事については別の機会を待つこととしたい。

頭了院日盛については先に述べた通りである。元禄十二年には正法院と同年令の六十四才であった。正住院日中は名僧の部に出ているが、河原町に住居、字は正己学徳秀逸とある。元禄十四年七十二才で遷化しているので、烈衆と

して名が列なつたのは七十才の時である。恵光院日通は学禅院の孫弟子として前述した僧である。智應院日感は松井房の十七世であり、一老職を勤めている。七十一才で遷化しているが、時に四十八才であつた。本園院日義は、学禅院の弟子のところで述べた僧である。時に四十九才。杉之坊日住は通師の弟子一老職を勤めた僧。本理院日住という。本行房の十三世、杉之房の十五世である。元禄五年杉之房の庫裏、客殿を再興、兩尊鬼子母十女の造立も行なっている。享保九年に七十二才で遷化しているので、時に四十七才である。覚林坊日俊とは、覚林房十六世一行院日俊のことである。一行院は西谷本應坊の二世であり、一行房の開基でもある。一行房の開基にあつては、下曾根村内藤源兵衛なるものが建立の施主となつているが、一行院が下曾根円明寺の住職^⑩を勤めた関係からであろう。坊跡録に依れば、「宝永六年に祖廟前読誦妙経全部の願を立つ」とあり、享保二年に日裕法主より妙経五千部成就他の功績にて本尊^⑪を受けているところから、九年間に五千部読誦を成し遂げたことがうかがえる。享保十一年七十四才で遷化、時に四十七才である。清水坊日説は、十七世遠光院日説である。通亨ニ弟子とあり、享保十八年七十三才で遷化、時に三十九才である。上段に名を列ねている僧の中にあつては若い僧である。南延坊日義は九世学立院日詮の事である。日詮については学禅院日逢の弟子として前述しているが、正徳三年六十四才で遷化、時の年令は五十才である。本蔵院日納は、南之房二十一世である。宝永三年に遷化、年令は不詳。日納遷化後、二十二世日栄代に玄理院日義の筆によつて過去帳が書かれている。

二段目の修了院日性とは、大善房十三世修了院日惺である。日惺は日悟とも云い、本行房の十四世でもある。享保四年に遷化、年令は不詳。知法院日秀は大林房十六世智法院日秀であらう。脱師門人、元禄十五年五十九才で遷化。時に五十六才。一音院日徳は南向房の十一世。元禄四年に鬼子母十女祖師之像を造立。施主は江戸善立寺法輪坊とあ

る。又、元祿二年に過去帳をつくっているが、その筆者は桶沢房二十三世惠光院日遙四十八才とある。惠光院は十年後の元祿十二年には五十八才である。一音院は南林房の六世でもある。正徳五年六十八才で遷化。時の年令は五十二才であった。□連院日順については、はっきりせず、日順に該当する僧を調べた結果、円心房四世圓長院日順（正徳元年遷化）南向房十四世通心院日順（享保二十年遷化）積善房十四世満行院日順（正徳六年遷化）らが考えられる。南向房は慈雲院日新の開基であり、慈雲院と号するところから、歴代を慈雲院と呼んでいるが、□雲院を慈雲院と読めるような気もしてくる。又、林行坊開基は智運坊日順だが、享保二年遷化なので、時代もふまえて考えると、□内が智のようにも読めてくる。円教坊日然は、十一世円教院日然である。円教房を元祿七年に再興、泰仙房と号した。享保十六年遷化。日然は敬神坊の二世にもなっている。元祿十三年、学禅院日逢が稲荷大明神の拝殿、社の造立に關し再興発願主となっているが、その時の本願が日然である。蓮信坊日具とは、五世智定院日具である。宝永八年遷化、年令は不詳。大運坊日義は、西谷大運坊十世大運院日義である。開基も大運坊日義といひ同名。享保八年遷化、年令は不詳。円覚坊日照については、松ノ木松樹庵歴代に光圓日照がおり、正徳元年に遷化しているところから年代の上では合致している。仙寿坊日盛については、上ノ山圓光庵三世仙了院日盛が享保四年の遷化、又、西之房十世堯心房日盛が享保元年の遷化であるので年代からは考えられるが、特定することは困難である。円柳坊日弘は、逢嶋圓柳坊の七世、中道院日弘である。西谷佐倉房の十一世代に客殿庫裏の再建を行なったことが省師板本尊に示されている。享保十三年遷化、年令不詳。圓柳坊は明治にはいり山之坊へ合併。延寿坊日了は、十世智運律師日了である。享保十五年遷化。年令不詳。松林坊日祐は、西谷松林坊十一世善妙院日祐のこと。禅定日祐、又禅妙院とも称した。両仏を造営している。正徳二年遷化。年代不詳。円信坊日清とは西谷大蓮房八世、圓信院日清である。大蓮房の開基日守は、

高座石に安置されている祖師宮殿（天文十四年十月第十三世日伝代に造立）の施主である。日清は元禄十六年に遷化。年令不詳。麓坊日明は二十二世正覺院日明である。享師の弟子で老僧三老とあるが、元禄十二年時に三老であったわけではなく、その後年令とともに要職に就いたものであろう。延享四年六十二才で遷化している。当時十四才の若さである。はたしてその年令で麓房日明と名のれたのだろうか。成道坊日徳は三世成道院日徳をいう。塩沢成道坊を再興造立と記録されている。享保八年遷化、年令不詳。観松坊日秀は蓮盛坊九世圓達院日秀のことである。脱師建立の三十六坊の内、田代にあった観松坊が正徳元年焼失した為、蓮盛坊に撰入すとの記録があり、蓮盛坊九世とはなっているものの、元禄十二年当時は観松坊の住職であったはずである。宗賢坊日運については、田代に宗賢坊があったとの記録はあるものの、妙量の名があるのみで歴世の書き込みは残念ながら何もない。中山坊日理は田代にあった中山坊の賢聖律師日理である。歴世がなく、代々賢聖律師日理と書かれている。享保三年遷化。年令不詳。観松坊、宗賢坊、中山坊と田代の坊が並んでいるのだが、その間にある本住坊は坊跡録中に見つかからない。しかし、田代の中に見塔坊という名の坊があり、歴代に見塔坊日信の名が見られる。本住坊日信と石には彫られているが、この日信が見塔坊の日信にあてはまるのではと考える。遷化年については亥二月六日とあるだけだが、元禄十二年以降の亥の年を見るに宝永四年あるいは享保四年あたりが考えられる。常栄坊日成は南谷常栄坊の開基常栄坊日盛である。三十二世省師代に玉蔵坊を撰入して常栄坊としているが、日盛は玉蔵坊の七世であり、この代に三十六坊の内の浄栄坊をも撰入し常栄坊と名のようになったとのことである。隆光坊日周は東谷覺樹坊五世である。覺樹坊は始は隆源坊と名のり、途中覚樹坊といい、後に善綱坊と名のった坊である。遷化年、年令共に未詳。

下段の名については、院号、坊号もなく、捜しにくいのであるが、日号とその前後の関係にて想像出来る場合があ

る。□性日相は樋沢房二十六世親性院日相と思われる。日相は正徳二年の遷化。年令は不詳。通然日芳は日号から樋沢房二十八世義俊律師日芳、享保十九年遷化がいるが、確かではない。了□日覚は南向房十二世の英俊坊日覚かと思える。一音院日徳の弟子で了念日覚といい、享保十三年五十五才で遷化、元禄十二年には二十六才。蓮久日喜は西谷常住坊三世常住律師日喜かと推察した。宝永五年の遷化。年令不詳。幸順日慶については学禅院日逢の孫弟子のごとろでふれているが、その他に西之房八世義貞房日慶享保十九年遷化、杉之房十六世日慶も考えられる。杉之房日慶はただ日慶とあるのみで、遷化年月日も無い。時代としては合致する。玄脱日陽は、覚林房十八世生善院日陽が考えられる。十七世は玄理院日義であるので、玄の字が付く玄脱日陽が院号を名のる時、生善院と称したのではと想像した。日陽は元文元年遷化。玄叔日幸については前述したので省略。学禅院の弟子の三段目に宗善日苗とあったが、ここでは宗善日妙、恵善日苗なる名がならんでいる。又、了達日覚とあるのは、妙石坊三世了達のことと思える。了達は高座石祖師堂の建立願主である。

おわりに

元禄時代六老僧の供養塔が建ち、高座石の発頭がなされた頃、山内僧侶の多くがその淨業に携わっていた。一つの石に彫られた僧侶の名を読んでいくうちに、身延観座の後董問題と、その後活躍した僧との関わりが浮かび上がって来た。中でも高座石妙石庵の開基として力を発揮した学禅院日逢とその門下の活躍が目立つものがあつた。その後しばらくの間、日省、日亨、日裕、さらに日潮へとその流れは続き、その中から不老日仲、止明日祥らが輩出していくのである。

〔註〕

- (1) 『身延山史』一五〇頁
- (2) 鈴木日壽編『身延山坊跡録』下七五
- (3) 『日蓮宗寺院大鑑』八九四頁
- (4) 『身延山史』一五一頁
- (5) 『棲神』第五十六号
- (6) 『身延山坊跡録』上五十四
- (7) 維時宝永三年十月十三日、妙石坊に現存。
- (8) 『身延山史』一五〇頁
- (9) 『身延山史』一五一頁
- (10) 『日蓮宗寺院大鑑』三三〇頁
- (11) 『身延山坊跡録』上二十
- (12) 『身延山坊跡録』上三十二、「蓮師棟札寛文十年九月吉祥日甲州身延山志摩房方丈棟札也日蓮建立之」とある。
- (13) 『身延山坊跡録』上九
- (14) 他に西之房八世義貞房日慶享保十九年化。文殊坊四世文殊坊日慶正徳二年化も考えられる。杉之坊十六世にも日慶が
いる。
- (15) 『身延山坊跡録』上二十五
- (16) 『日乗上人日記』七九〇頁
- (17) 『身延山坊跡録』上六。「追師代富山江来ル 脱師代真浄房被仰付不残坊再建并諸尊佛具亦造立梅平田地新甲全四十兩
分永代坊江附ル 省師代中座入被仰付 亨師代被爲属 御門弟 裕師代當番役被仰付 同代五老僧入 同代一老役勤
高座四百五十遠忌享保十六辛亥年法用相勤同年十一月十三日隠居年七十六才也
- (18) 正徳三年九月二十日化。
- (19) 『日蓮宗寺院大鑑』四一四頁 円明寺第八世。二世法住院日宗は覺林房十五世である。
- (20) 『身延山坊跡録』下三十一

通師門人字禪院と身延衆徒（奥野）

通師門人学禪院と身延衆徒（奥野）

- (21) 日裕師御本尊脇書寫、「奉誦誦、妙法五千部成就又塔頭 祖廟前永代毎日不退誦誦全其、施僧料甲金一百兩細在、日亨師之、其、人也、主編列、吾山之評定座、己至一番日役、勤且又兼帶下自櫻村京、立本寺末流、円明寺聖跡彼寺本論、有功分在、、感其此等功及有志誠心而今預許、贈聖号於吾山、以勵末生修善之勞勲、授与之一行房一、行院日俊聖人、妙石坊に現存。
- (22) 「身延山坊跡録」上五十四
- (23) 「身延山坊跡録」下四十一
- (24) 「身延山坊跡録」下五十六
- (25) 「身延山坊跡録」上上八
- (26) 「身延山坊跡録」上四十六

数字は遷化年令()内は元禄十二年時の年令

西曆	和曆	歴代	学禪院日逢の墓碑	書写石經烈衆の碑
一六九九	元禄十二	日省		五月十三日碑建立
一七〇〇	十三	日省		
一七〇一	十四	日省		正住院同廣日中72(70)
一七〇二	十五	日省		智法院日秀59(56)
一七〇三	十六	日省		圓信院日清
一七〇四	宝永元	日亨	学禪院日逢74(69)	
一七〇五	二	日亨		
一七〇六	三	日亨	惠光院日遥65(58)	惠光院日遥・本蔵院日納

通師門人学禪院と身延衆徒（奥野）

一七二四	九	日裕		本理院日住 72 (47)
一七二三	八	日裕	本因院日義 73 (49)	本因院日義・大運院日義・成道院日德
一七三二	七	日裕		智應院日感 71 (48)
一七二一	六	日裕		
一七二〇	五	日裕		
一七一九	四	日裕		修了院日惺
一七二八	三	日裕		賢聖律師日理
一七二七	二	日裕	顯了院日盛 72 (54)	顯了院日盛・智運坊日順
一七二六	元	日裕	享保	觀松坊日秀
一七二五	五	日裕		一音院日德 68 (52)
一七二四	四	日裕		
一七二三	三	日裕	学立院日詮 64 (50)	玄理院日義
一七二二	二	日亨	觀性院日相	善妙院日祐
一七一	元	日亨	正徳	智定院日具・光圓日照
一七二〇	七	日亨		正法院日運 75 (64)
一七〇九	六	日亨		
一七〇八	五	日亨	宗善坊日頭	宗善坊日頭・一乘院日心
一七〇七	四	日亨		

一七四二		二	日潮		
一七四一	寛保元	元	日潮		
一七四〇	五		日潮		
一七三九	四		日潮		
一七三八	三		日潮		
一七三七	二		日潮		
一七三六	元文元	元	日潮		
一七三五	二十		日竟		
一七三四	十九		日竟		
一七三三	十八		日竟	智光院日妙	遠光院日説73 (39)
一七三二	十七		日竟	泰秀坊日亮	
一七三一	十六		日裕	統要院日将	円教院日然
一七三〇	十五		日裕		智運律師日了
一七二九	十四		日裕		
一七二八	十三		日裕		英俊坊日賞55(26)・中道院日弘
一七二七	十二		日裕		常栄坊日盛61(33)
一七二六	十一		日裕		一行院日俊74(47)
一七二五	享保十		日裕	寿量院日久68(42)	